

トランプ物語

砂田 弘 著 こさかしげる 絵





偕成社の創作

ト ラ ン プ 物 語 もの がつり

NDC 913 偕成社 179p 22cm 1982 年

発 行 1982年 9 月 初版第 1 刷

著 者 すな砂 だ田 ひろし弘

発行者 今 村 廣

発行所 株式会社 偕 成 社

〒162 東京都新宿区市ヶ谷砂土原町

電話(03)260-3221 振替 東京 5-1

印 刷 新興印刷・小宮山印刷／製 本 文 勇

ISBN4-03-635150-8 © 砂田 弘 ことかしげる

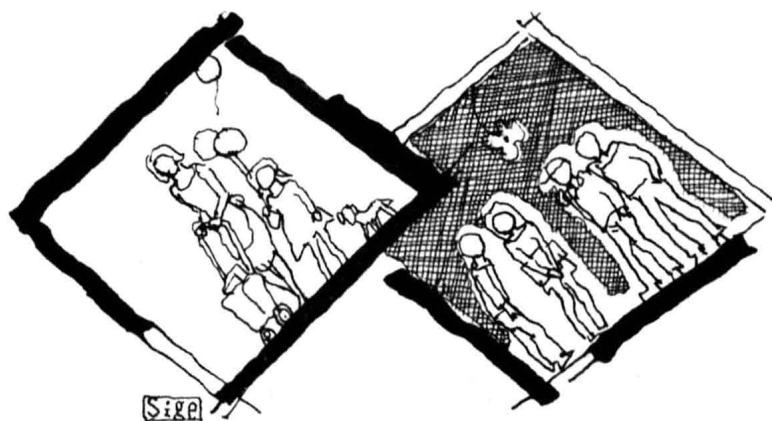
Printed in Japan 落丁本・乱丁本はおとりかえいたしま

トランプ物語

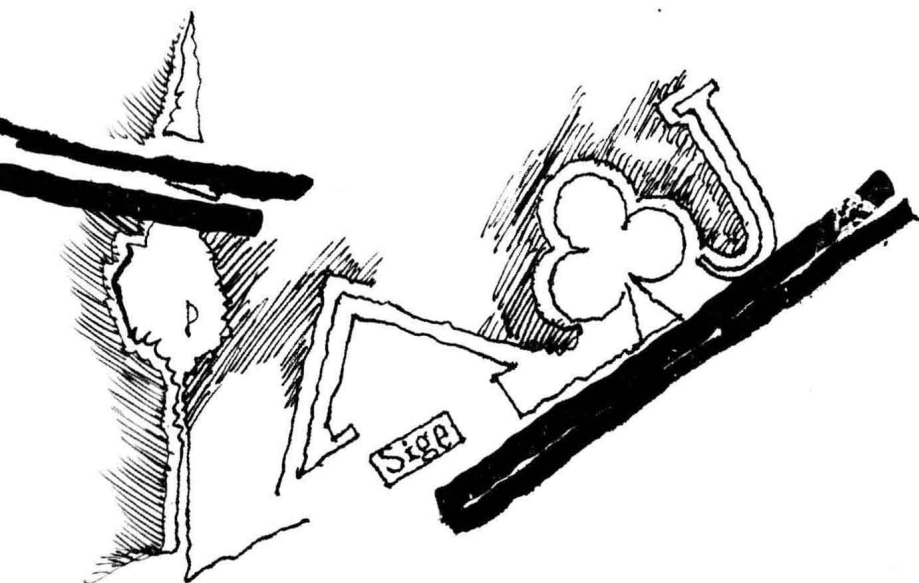
砂田 弘 著／こさか しげる 絵



トランプ物語
ものがたり
／
もくじ



10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
初雪の朝	百発百中！	おばあさんのいのり	きみはUFOをみたか	父の再婚	泣きつづらにハチ	朝子の七夕	くもりのち晴れ	11日間のしあわせ	春風のいたずら
135	119	105	91	76	63	49	35	21	8



11

とべ！ ほくらの女王

150

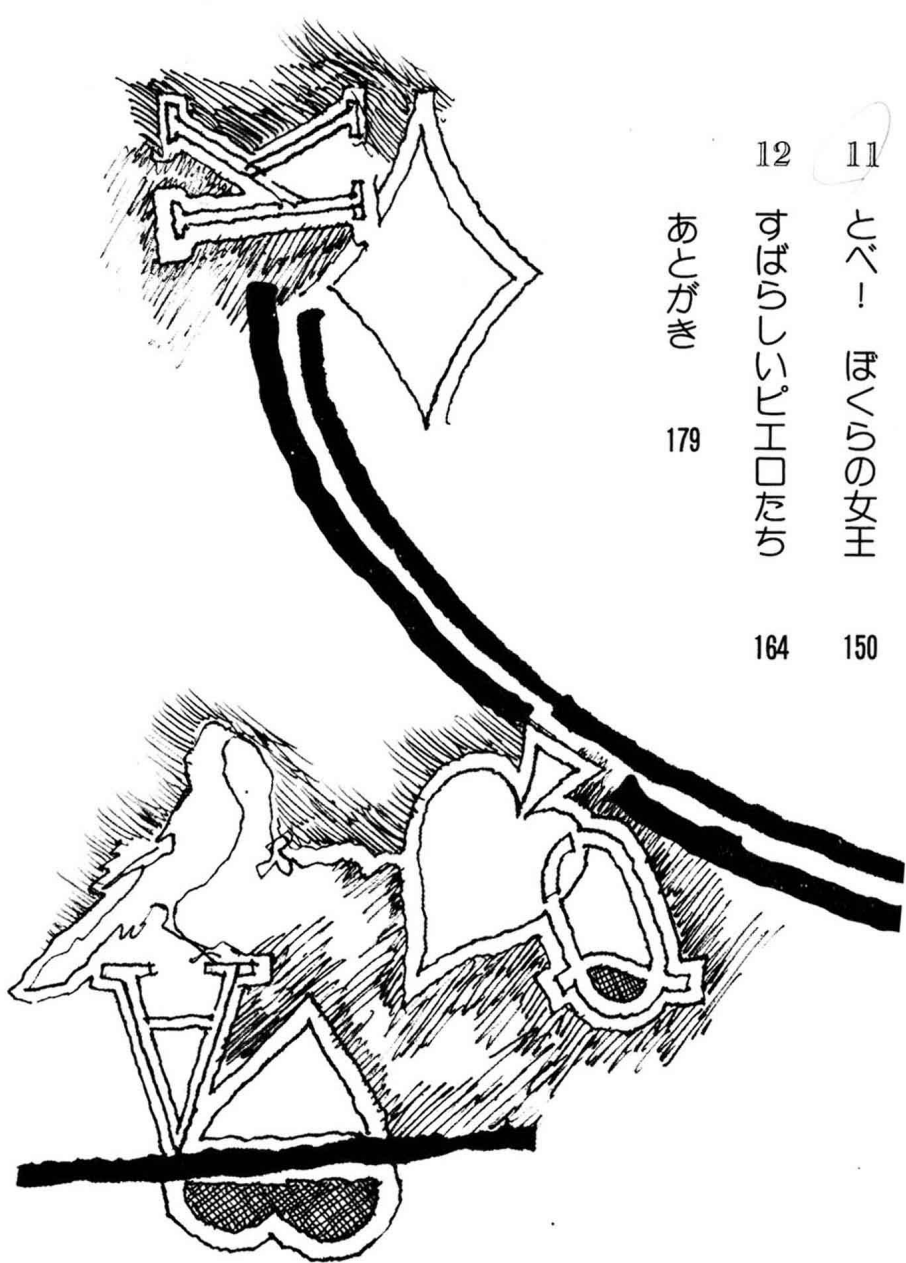
12

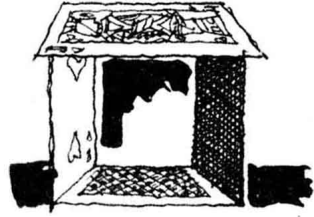
すばらしいピエロたち

164

あとがき

179





著者・砂田 弘（すなだ ひろし）

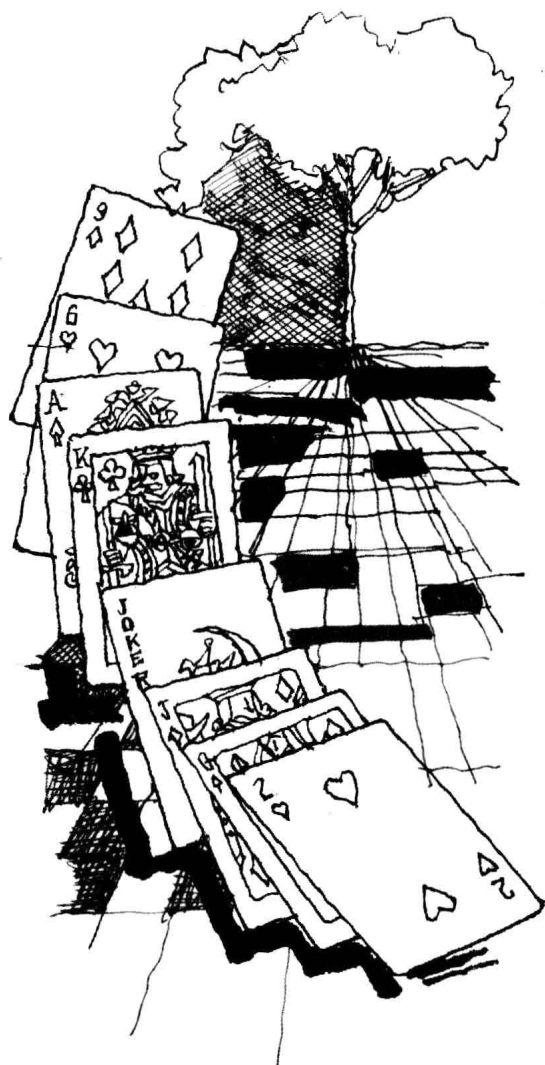
1933年、朝鮮に生まれる。早稲田大学仏文科卒業。出版社に勤めたのち、文筆生活に入る。県立山口女子大教授。日本児童文学者協会会員。作品には『東京のサンタクロース』『道子の朝』『さらばハイウェイ』（日本児童文学者協会賞）『六年生のカレンダー』『五年生のスケッチ』『きゅうきゅうしゃのびぼくん』『二死満塁』など。住所／山口市宮下堤2944-1

画家・こさか しげる（小坂 茂）

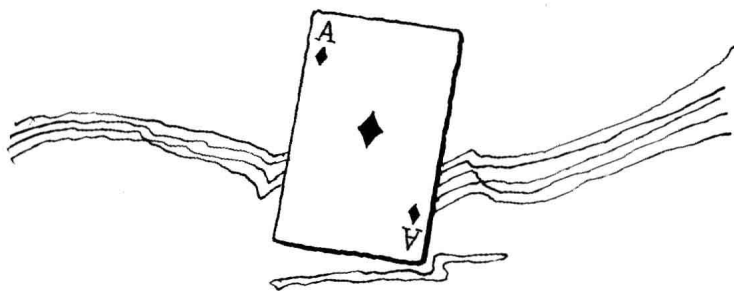
1925年、東京に生まれる。日本美術家連盟・春陽会・童美連会員。絵本・さし絵で活躍のほか、個展・グループ展に活発な創作を続けている。72年、第21回小学館絵画賞を受賞。最近の作品に『じてんしゃ特急、牧場行き』『魔女とめがね』等がある。また、箱根彫刻の森美術館と佐久市立近代美術館に作品收藏。住所／東京都杉並区下井草3-11-13

ト
ラ
ン
プ
物
語

砂
田
弘



1 春風のいたずら



トランプのカードは、ジョーカーをいれて全部で五十三枚。よくきつてから、一枚ひいてみましょう。ひきあてたカードから、きょうの物語がうまれます。

はい、今月のカードはダイヤのエース。ダイヤのマークは、お金をあらわしています。こいつは春から縁起がいい。さっそく物語の幕をあけることにしましょう。



四月なかばの日曜日の昼さがり、数学の教科書とノートをひろげた机の上に両ひじをついて、秀高はうつらうつらしはじめていた。

秀高は中学一年生。秀高一家の住まいは、十一階建てのマンションの三階にある。ペランダ

ごしに勉強^{べんきやう}をやまでさしこんでくる日ざしの心地^{こころち}よさといったら、湯かげんのいいふろにつかっているようだ。だれでも、しぜんとまぶたがおもくなる。

父は朝早くからゴルフにでかけ、母と妹もデパートへ買い物^{もの}にでかけた。秀高^{ひでたか}もさそわれたのだが、

「ぼく、数学^{すうがく}の宿題^{しゅくだい}があるから。」

と、胸^{むね}をそらしてことわった。

「あら、どういう風のふきまわし。」

母のまねをして、妹の京子^{きやうこ}も「あら」とさげび、兄の顔^{かお}をみつめた。いままで、こんなことはいちどもなかったからである。

「新学期^{しんがつ}がはじまったばかりだろう。いまおくれちゃうと、とりかえしがつかなくなる。」
半分^{はんぶん}は本音^{ほんね}だった。しかし、半分^{はんぶん}は魂胆^{こんたん}があつてのことだった。あと十日^{とおか}ほどで、秀高^{ひでたか}の誕生日^{たんじようび}がめぐってくる。誕生日^{たんじようび}のプレゼントに、秀高^{ひでたか}は小型^{こがた}のカセットをほしがっていた。ひとりで留守番^{るすばん}をして数学^{すうがく}の宿題^{しゅくだい}をしたというニュースは、今夜^{こんや}のうちに、父の耳にはいるだろう。うまくいけば、望^{のぞ}みの品^{しな}が買ってもらえるかもしれない。

だが、はりきって勉強^{べんきやう}をするには、天候^{てんこう}があまりにもどかすぎた。やっとのことで、

方程式を三問ときおわったところで生あくびがで、応用問題にとりかかろうとしたときには、もう半分ねむっていた。もともと、秀高は勉強がすきなほうではない。ことに数学は大の苦手である。両親はわが子の将来に期待をこめて、秀高というりっぱな名前をつけたのだが、成績にかぎっていうと、目下のところ、せいぜい良高といったところだった。さわやかな、しかしいかにも春さきらしい強い風が、あけはなした窓からさつとふきこんできて、定規やペーパーナイフをさした筆立てがたおれ、その音で、秀高はあさいねむりからさめた。つぎのしゅんかん、ベランダの上になにか紙きれか葉っぱのようなものが、ひらひらまいおちてくるのがみえた。

はて、なんだろう。立ちあがって二、三步あるき、ベランダをのぞきこんだ秀高は、おもわず「あっ」と低いさけび声をあげた。まん中から二つにきりはなされた一万円札の片方がおちていたからである。

素足のままベランダにおり、ひろいあげた札を太陽にかざしてみた。ちゃんとすかしもはいっている。聖徳太子の肖像のある右半分だったが、おもちゃやにせ札ではなく、ほんものの一万円札だった。

もう片方も、どこかにあるにちがいない。ねむけがいちどにさめた秀高は、父が趣味

でそだてている盆栽ぼんさいの鉢はちを一つずつしらべ、ついでに両りょうどりのベランダものぞきこんだが、それらしいものはみつからなかった。

すると、地上ちじょうにまいおちたのか。秀高ひでたかはサンダルをつっかけてドアをとびだし、階段かいだんをかけおりて、地上におどりでた。マンションの建物たてものにそってつづくコンクリートの道を、下をみながらゆっくりあるき、一階かいの各かくへやのベランダの中も、鉄てつのさくごしに無遠慮えんりよにのぞきこんだ。しかし、聖徳太子しょうとくたいしの相棒あいぼうは発見できなかった。

まさか天からまいおちてきたわけではないだろう。秀高ひでたかはクリーム色のマンションをみあげた。何階なんがいのどのベランダから、あるいは窓まどからおちてきたのか。またどうして、札さを二つにきったのか。四階かい、五階、六階と、階数かいすうをかぞえながら、秀高は十一階まで順じゆんにみあげていった。



ちょうどそのころ、マンションの九階かいの一室しつでは、ちょっとした騒動そうどうがおこっていた。「ミシンの上においたというのはほんとうだろうね。」

歓声かんせいのひびくテレビの画面がめんから目をはなさずに、わかい父親ちちおやがたずねた。後樂園球場こうらくえんきゆうじょう

の巨人・阪神戦は、七回表までですんでいた。

「ほんとうよ。買い物にいくのに、こまかいお金がないので、タンスからだして、おい
ておいたの。」

ジーンズのスカートのにあう、わかい母親がこたえた。

「へんじゃないか。泥棒がはいるわけではないし。よくさがしてごらんよ。」

「それが、いくらさがしてもないんです。」

「じゃ、きみの勘ちがいだ。どこかべつの場所においたんだろう。」

「いいえ、たしかにここにおいたんです。」

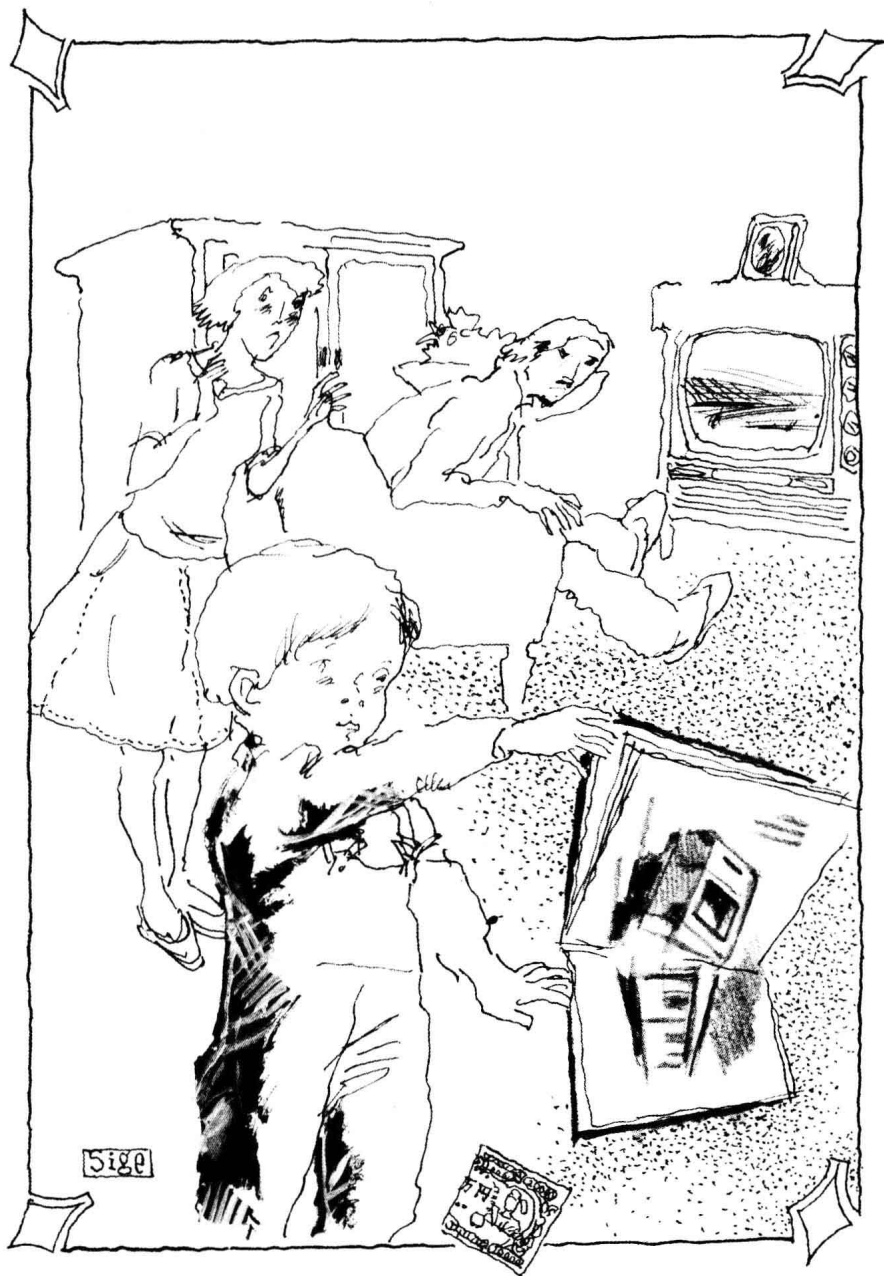
「じゃ、ぼくがとったとでもいうのか！」

父親がそうどなったとき、へやのすみで絵本をみていた三歳くらいの男の子が立ちあ
がり、

「パパ、ほら、ちかてつだよ。」

あごをしやくり、ひらいたページを父親のほうにかざしてみせた。そのとき、絵本の
あいだから、紙きれのようなものがじゅうたんの上におちた。

「あったわ。」



ダイビングでもするように、母親ははおやはそれにとびついたが、

「あら、半分はんぶんしかないわ。」

急きゆうになさけない声になった。

野球やきゅうをたのしんでいる場合ばあいではなかった。父親ちちおやも子どものそばにやってきた。へやのすみにつきみあげた絵本えほんのかけに、はさみがひかっているのがみえる。あのはさみできつたのにちがいない。

「マサル、もう半分はんぶんはどこへやったの？」

母親ははおやからにらみつけられて、男の子はなにもいわずに、わっと泣なきだした。母親はますますいらだち、

「どこよ！ どこ？」

そうくりかえしながら、子どものおしりをたてつづけにぶった。泣なき声こえはいっそうたかくなる。

「しかるのはあとでいい。どこかにあるはずだ。さがしてみよう。」

二ひきの親おやガメのように、ふたりははいつくばって、へやじゅうをさがしまわった。ペランダもさがした。紙かみくず箱ばこもひっくりかえしてしらべた。花びんの中までのぞいてみた。

「きょうは、風があるからね。風で外にとんだのかもしれないな。でも、そのうち、みつかるさ。」

「みつかるって？」

「だれかがとどけてくれるさ。」

「とどけてくれるって？ もしだれかがお札の半分をひろったとしても、それがうちのお金って、どうしてわかるの？」

警察に捜索願いでもだしておけばつだけど。あなた、

交番へいつてくださる？」

母親のいうとおりだった。といって、交番にとどけるのも体裁がわるい。何十万とい

う大金がなくなったわけではあるまいし。

「子どもの手のとどくところに、金をおいておくのがわるいんだ。」

いいまかされた腹いせに、父親はちょっぴり皮肉をいった。母親もまけてはいない。

「はさみの使い方をおしえたのは、あなたでしょう。うまいって、ほめてたじゃない。」

すかさずいいかえし、

「わたしが洗たくをしているあいだにやったのよ。あなたはすぐそばにいたくせに、テレビの野球に夢中になっていて、はさみでジョッキジョッキやっていたのに気がつかなかっ